

水戸市波里町の長者山荘（水戸市老人保養センター）にある石碑を訪ねることになったいきさつから述べてみましょう。

私は、第二の職場として御三家の一つである水戸徳川家に勤務した関係で、郷土史、特に水戸家に関する史実をさぐる研究、調査をするこゝとに興味を覚え、その史料収集の過程で常野文献社の小堀弘伸さんと知り合い、何回かお会いして郷土史や復刻版の発行計画など伺っていました。

その中で諸生派に関する史料が天狗派のそれと比べると非常に少ないこと、特に諸生派が会津から越後にかけて西軍（薩長軍）と戦った出雲崎・灰爪の激戦に関する史料が少ないので探している旨を告げると、ひたちなか市稲田（旧佐野村）の稲田秀男さん（元国鉄勝田電車区助役）を紹介してくれました。稲田さんは在職中から越後方面へ現地調査をし、地元の人々に会って史料を集め、自費出版で「天狗争乱の傷痕」巻一〜三までを発行された方です。

稲田さんは、在職中から何回か越後に脚を延ばされましたが、ある時灰爪の荒木家光さんから当時の状況を伺っているうちに、荒木さん所有の裏山の小高い丘の上で、昭和五十二年頃、三回にわたり人骨四体が発見され、鑑定の結果、水戸の諸生の人びとの骨ではないかという事から、丁重に葬り、その状況を水戸市役所に連絡したのだが仲々埒があかないという話を聞きました。それを知った稲田さんたち茨城の篤志家三人が、供養碑を建てる資金として役立ててほしいとお金を寄付され、地元の協力を得て立派な供養碑が建立されたそうです。小堀さんから稲田さんに会ってみてはと言われた時、私も以前新荘地区ふるさと研究会で年に一回史跡探訪に灰爪を訪ねた際、現地で荒木さんから説明を伺った事があるだけに更に深い関心がありました。

早速稲田さんを訪れ、昔の国鉄時代（私も国鉄出身）の思い出話などをしてしばし打ちとけた後、「天狗争乱の傷痕」巻二・三の贈呈を受けました。巻一は残部なしとの事でした。その際稲田さんが言われるには貴方も飯富に住んでいるならば、最近渡里に老人保養センター長者山荘が創設され、国道一二三号線から長者山荘に至る通路の右側に、市川三左衛門に関する石碑があるので確認してみてもとの助言がありました。

以前から求めている諸生に関する史跡だけに是非譜べてみたいと思い、早速三月二十三日（土）に長者山荘を訪ねました。飯富から渡里を経由して国道一二三号線を水戸に向う途中、金沢坂を登り切った左側に山荘に通ずる道路があり、一五〇〜二〇〇メートル入った右側に、当該碑が小高い塚の石段を五〜六段昇った所に、正面は北向きに（会津の方向に）建っています。文面にはハッキリと大きな字で次のように刻まれています。

市川三左衛門会津ノ戦

終り國元へ引揚グ家来

市毛善八郎付随ス弟市

毛熊五郎為記念建碑ス

当年八十三歳

碑の上部には市川と市毛二家の家紋が刻まれています。また、その右前奥には、

この地によせて

この地は老人福祉施設用地と

して地権者各位の御好意により

寄付を受けたものです。その志

に対し深く感謝の意を表します

また 地内に建立されている記

念碑を移設しここに末永く保存

いたします

平成三年三月吉日

水戸市長 佐川一信

という碑が建っていました。

碑文にみえる市毛善八郎の子孫が判れば石碑にかかわる種々の経緯が伺えると思ったが判らず、二十五日(月)に再度長者山荘を訪れた時に、長者山荘の所長である鈴木操氏が子孫であることがわかりました。鈴木所長は喜八郎の孫娘が母親であるので、曾孫にあたるわけです。

もともと、この碑は国道から二〇〇メートル位入った林の中に建てられてありました。ところが長者山荘が建設されるについて現在地に移転されたのかとお伺いしたところ、そうではなくて、十数年前に一二三号線が改修され、拡幅のうえ、曲がりくねった道路を直線に変更する計画が提案されました。旧道は長者山荘の入り口付近から左へ折れて金沢坂の山の下の崖下に沿って田野川の脇を通る曲がりくねった道でした。これを改良するための山林の土地買収が提案されそれぞれの地主を集めて趣旨説明することになりました。この石碑を建てた当時(約七十年位前)は地主は四人でしたが、その後四十一名に地権者が増えました。その一人一人を県では調査し確認したそうです。その時の責任者として取り纏められたのが鈴木操所長さんでした。何十回となく打合せをしたり調査したり確認の仕事は大変だったとの事です。その結果買収することに同意を得られたものの、買収価格、売渡価格等それぞれの価格差の問題からトラブルは起きます。手取り価格でも上下の間では、甚だしい格差を生ずることは考えられるわけです。そこでこのトラブルを無くするためには、寄付行為にすれば無償であるため問題はないという結論に達し説得に当たったそうです。その代りに市側にここにある碑を現状と同じ形態で移設するという条件、及び敷地内に老人ホームの新設を要求しました。結果的に老人ホームでなくとも、老人保養センター建設であるので納得されたとの事です。移転前の碑の位置は、今の長者山荘事務室内の所長の座る椅子の箇所あたりだったそうです。又碑は、当時山中の林の中で見つかりにくい場所に建設されました。その理由は当時諸生派であれば、大手を振って歩ける時代ではなかったたので碑を見つけたり難しい山の中に建設したのだそうです。現在となつてはそんなわだかまりのない時代になったので表に出しましょうということになりました。

さて、市毛善八郎の弟熊五郎は、市川三左衛門に付随した兄の為に如何なる理由でこのような立派な碑を建てたのでしょうか。三左衛門と共に弘道館での戦いで敗れ銚子へ逃走の際、兄善八郎は天狗派の追討を避けて弟熊五郎の屋敷に身を隠し、匿われました。当時熊五郎は庄屋クラスの身分でしたので、屋敷は広く、田野川のほとりにありました。現在は一二三号線が改修されたので、その真下が当時の屋敷の位置だそうです。善八郎は熊五郎屋敷の地下室(多分野菜などを収容していた)に隠れていましたが、天狗派の搜索はきびしく、その所在もつきとめられ、兵士達が善八郎の身柄を引渡せ、さもなくば一家皆殺しにするぞ、など脅しをかけてすごんできました。熊五郎は兄を助けたい一

心で極力隠し通しましたが、これも難しいと思われた矢先、善八郎自ら現れ名乗り出て、俺が出るから弟一家の皆殺しは止めろと自ら縛につき長岡原で斬首されました。時に明治元年、喜八郎三十三才の時でありました。

このため、熊五郎一家は皆殺しに合わず、生き延びる事ができたので、この兄に感謝し、その恩義に報い、軍功（いさおし）を後世に顕彰する心情から石碑の建立となったものと思われまます。この碑は弟の熊五郎が八十三才（大正十三年頃）になった時、世情も漸く落ちつき、永い間の心のわだかまりとなっていた兄の遺業を顕示しようと建碑するに至ったものと思われまます。この熊五郎はその三年後昭和二年十二月七日にこの世を去りました。

市毛善八郎は、市毛家に生まれましたが、今の常北町増井の大森家に養子に入り、大森を名乗っています。「水戸藩国難事件殉難者名簿」には、「大森善八郎」として掲載されています。墓地は増井の大森家個人墓地です。

なお、昭和十一年十月、林の中に石碑があった頃、記念式典が催され、大洗の常陽明治記念館の創始者である田中光願が参列し、記念写真を撮りました。その写真も現存しています。田中光願は特に幕末の水戸藩の勤王志士達について特段の理解と景仰を示した人物で、昭和十四年三月に九十七才の高齢で長寿を全うしました。その三年前九十四才で水戸に来て、記念式典に参列したのですから写真のかくしゃくとした様子に対し唯敬服するばかりです。

以上まだ不明の点が多く、更に調べたいと思っています。